

18世紀前後の“The Elements of the Irisch Language”の流れと発想について

三宮，郁子
九州大学教養部

<https://doi.org/10.15017/6796224>

出版情報：言語科学. 22, pp.33-50, 1987-02-28. 九州大学教養部言語研究会
バージョン：
権利関係：



18世紀前後の “The Elements of the Irish Language”の 流れと発想について

三宮 郁子

- 0. まえがき
- 1. “The Elements of the Irish Language”の由来
- 2. “The Elements”の構成とその流れ
 - 1) 構成
 - 2) “The Elements”の流れとカテキズム著者のアイルランド語観
 - 3) “The Elements”の母音論
- 3. 結論

0. まえがき

V. Salmon(1985, pp. 347-8)は1600年代のアイルランドにおけるプロテスタントの活動と北米のインディアン教化のために奮闘した宣教師の活動に類似性を認めているが、なかでもアイルランドの国教会派の宣教師がアイルランド語について多少の記述のついたカテキズムを教化に大いに利用したことに注目し、言語研究者の目がこのような資料にもっと向けられるよう促し次のように述べている。

“Outside Ireland, few historians of linguistics have noted the extraordinarily interesting socio-linguistic situation in this period [i.e. 16th and 17th centuries], when English Protestants and native born Jesuits and Franciscans, revisiting their homeland covertly from abroad, did battle for the hearts and minds of the Irish-speaking population - nominally Catholic, but often so remote from contacts with their Mother Church that they seemed, to contemporary missionaries, to be hardly more Christian than the Amerindians. ... (But) it was in the 17th century that consistent and determined efforts were made by individual Englishmen, holding high ecclesiastical office in Ireland, to convert their nominal parishioners, not by forcing them to seek salvation via the English language, but to bring it to them by means of Irish-speaking ministers preaching the Gospel and reciting the liturgy in their own vernacular.”

17世紀末までにあらわれた、多少なりともアイルランド語に関する記述のあるめばしい資料として Salmon は次の5点をあげている。

- (1) Catechism of 1571 by John O’Kearney.
- (2) Catechism by William Bedell in 1631.
- (3) Theobald Stapleton’s Catechism[sic] of 1639.
- (4) William Perkins’ catechism translated by Godfrey Daniell in 1652.
- (5) Catechism[sic] published at the instigation of Robert Boyle in 1680.

このうちアイルランド語の記述が英語でおこなわれているのは(2)のみで、(3)はラテン語、(1)と(5)はアイルランド語で書かれている。そして(4)についてはただアルファベットの文字がアイルランド文字と普通のローマ字で書かれたもの及びアイルランド語と英語で使われた省略記号の一覧が1ページ分ついているだけである。

これらの多くは I. Michael(1970, pp.149-150)が英語の文法範ちゅうの史的研究の対象資料とした文法書の基準からは外れる。つまりパンフレットやリーフレットの類であって、いわゆる 'parts of speech' の列挙は殆どなく、従って「文法書」とはみなしえない種類のものかもしれない。実際 Osborn Bergin(1938, pp.216-220) は、アイルランド語に関する最初の印刷された文法書を Rev. Francis O'Molloy のラテン語による *Grammatica Latino-Hibernica*(Rome, 1677) とし、また英語による文法書を Hugh Mac Curtin の *The Elements of the Irish Language Grammatically Explained in English* (Louvain, 1728)¹ とし、Mac Curtin 以前や O'Molloy 前後の英語を媒体とした言語研究や出版活動については言及していない。しかし、Salmon の掲げた1600年末までの出版物とともに1700年代前半の資料も加えて比較してみると² これらの「パンフレット」や「リーフレット」級の言語記述はその多くがプロテスタントのものでありながら、アイルランドの伝統的な bardic school の語学を踏襲していることが増し、そして Mac Curtin に繋がっている。教化やカテキズム等の出版に際しアイルランド語とアイルランド語文字の使用を唱えた J. Richardson もこういった流れのなかで評価すべきである。また Bergin によって Mac Curtin が作ったとされている術語も (Cf. Bergin(1938))、実際はそれ以前に公になっていることがわかり、英語によるアイルランド語学は Mac Curtin よりはもう少し遡って出発する必要があるだろう。

1. "The Elements of the Irish Language" の由来

1500年代半ばから1700年にかけて聖書や The Book of Common Prayer がラテン語や英語からアイルランド語に翻訳され出版されたがこれらにはアイルランド語を読むためのガイドやその他の言語に関する注意書きはついていない。これに対しカテキズムにはページ数の多少はあるが、大抵付録として巻頭か巻末に概ね "The Elements of the Irish Language" というタイトルのものがついている (以下 "The Elements" と言及)。これはおそらくカテキズムの方がより直接的に改宗や教化に結びついているからであろう。すなわち、特にプロテスタントの宣教師たちは言語を全く異にするアイルランドのカトリック教徒を改宗させ、彼らに分かるような言葉で教え導いてその魂を救済せねばならなかった。事情はどうやら日本に渡来しキリスト教の布教を行なったイエズス会の宣教師らの直面した問題と似ている。一方その当時の政治事情の下では思うように自由な活動を行なえなかったカトリックの司祭たちも、プロテスタントからカトリック教徒を守り、彼らに母国語で理解できる教義書を与える必要に迫られていた。つまりカテキズムを前にしてその言語指導についてはアイルランド語をすでに知っている者は書かれた文字を読むことができるように、未習得の者は何とか文字を声に出せるように指導すること、つまり "literacy"、"reading ability" の向上を目指すことがカトリックにとってもプロテスタントにとっても共通の急務であった。従って "The Elements" の大半が文字と音の説明に費やされているのはカテキズムを布教、教化に利用する際の必然から生まれた結果ともいえる。

Salmon の掲げているもののうち "The Elements" のある4つと、1700年代の前半のプロテスタント及びカトリックの英語かアイルランド語による主なカテキズムを加えると次の表の通りである。([] は大英図書館カタログ中の出版推定年。原典タイトルページには出版年の記載がない。)

表1

宗派	出版年	出版地	著者	翻訳者	本文言語	'ABC'言語 ³
(1)新	1571	Dublin	O'Cearnaigh		Irish	Irish
(2)新	1631	Dublin	W. Bedell		Eng./Irish	Letters ⁴
(3)新	1652	Dublin	W. Perkins	G. Daniel	Eng./Irish	English
(4)旧	[1663]	Louvain	J. Dowley		Irish	Irish
(5)新	1680	London	R. Boyle		Irish	Irish
(6)新	1712	London	J. Lewis	J. Richardson	Eng./Irish	English
(7)旧	1728	Louvain	J. Dowley		Irish	無 ⁵
(8)新	[1740]	London	不明		Eng./Irish	English
(9)旧	1742	Paris	A. Donlevy		Irish/Eng.	English

また、表1に挙げたカテキズムのうち（7）以外には“The Elements”があるが、これらはそのカテキズムの表紙や目次及び言語記述の冒頭にそれぞれ次のように記されている。

表2

	出版年	表紙/目次	冒頭
(1)	1571	Aibidil Gaoidheilge	Aibghitir ⁶
(2)	1631	(The A, B, C.)	The A, B, C.
(3)	1652	Brief and Plain Rules for the Reading of the Irish Tongue.	Brief and Plain Rules of the Reading of the Irish Tongue.
(4)	[1663] ⁷	---	----
(5)	1680	無	Grammeir Aithghearr na Goidhilge (Abbridged Grammar of the Irish Language)
(6)	1712	無	The Elements of the Irish Language.
(8)	[1740]	Brief and Plain Rules for Reading the Irish Language.	The Elements of the Irish Language.
(9)	1742	The Elements of the Irish Language	The Elements of the Irish Language

“The Elements of the Irish Language”といえはMac Curtinの文法書を思い起こすことが多いが、表2に見るように、実際には1712年のプロテスタント版に既に用いられ

ている。また“Brief and Plain Rules”も遡れば1652年のG. Daniell訳のカテキズムに付随するものに辿りつく。一方“The Elements”を“ABC”と同義とする解釈も成り立つ⁸。とすれば“The Elements”というタイトルは遡れば1571年の Aibidil に由来すると考えてよい。

2. “The Elements”の構成とその流れ

1) 構成

前段で1571年版がカテキズムのひな型になっていると述べた。それ以後に印刷出版されたものにはアイルランド語を声に出して読むためのガイドが必ず付録としてつけられたからである。このことは単純な ‘literacy’ の向上という教育的な意味、そして教化と言う宗教的な意味だけでなく、当時の言語状況がそれだけ文字と実際の音の間に開きがあり、文字を音に結びつけるルールを示す必要があったからだということも意味している。

“The Elements”は概ね次のような構成になっている。

- (1) 文字の説明
- (2) 母音字及び音の説明
 1. ‘Broad’ vs ‘slender’ vowels
 2. ‘Diphthongs’ and ‘triphthongs’
- (3) 子音音の説明
- (4) 略記号の説明
- (5) その他

Mac Curtinの文法までのどの“‘The Elements’”もほとんどが文字論と音声論とが混在したような記述になっており、一見取るに足りないと思なされがちである。しかし細部に注目すると版によって少しずつ異なる部分があり、それらはしばしば言語観や言語政策上の立場の違いの反映であったりして見過ごすわけにいかない。以下でこれらの詳細をみてみることにする。

(1) 文字の説明

どの“‘The Elements’”も冒頭はアイルランド語で（そして二か国語版の場合は（比較対照的に）英語で）用いられる文字を列挙している。1571年版ではk, q, zを加えて21を挙げ、また1680年版はxを加えて19を挙げている。しかし、1631年版、1652年版、1712年版、そして[1740年]版では18文字のみを挙げ、特に1652年版、1712年版、そして[1740年]版ではアイルランド語では18文字しか用いないと言明している。1712年版の文字リストを踏襲している[1740年]版には次のような表がつけられている。

In the Irish Language there are only these Eighteen following Letters.			
Name	Figure	Pronunciation	
Ailim	2l a	a	Lat. or Fr.
Beith	o b	b	
Coll	C c	k	
Duir	o d	d	
Eadha	e e	e	Lat. or Fr.
Fearn	f f	f	
Gort	g g	g	Gr.
Uath	h h	h	
Iogha	i i	i	{ Fr. or Ec Eng.
Luis	l l	l	
Muin	2l m	m	
Nuin	N n	n	
Onn	O o	o	
Pcithboc	p p	p	
Ruis	R r	r	
Suil	S s	s	
Tinne	T t	t	
Uir	u u	u	on Engl.

表1にあげた様々な版を比較してみても文字に関して音韻論的な観点から興味深いのは、これらと同時期に出版されたMac Curtinの文法書(1728)及びそのいわば再版のMac Curtin-Beglyの辞書(1732)では17文字だけを文字とみなし、hはリストからも除外していることである。

1652年版及び1712年版以降のものではリストに個々の文字のアイルランド語名が示されるようになる。特に1700年代の版になるとそれぞれの文字の近似の音価を英語やフランス語、ギリシャ語、ラテン語の音価を引用して説明しようとしている。このように他の外国語音を音価の記述に用いているのは二か国語版である。これはアイルランド語を

被記述言語として強く意識していることの現れであろう。

文字の名前とは古来伝統的に用いられて来た ogham名であるが、oghamの配列 (i.e. B,L,V,S,N; H,D,T,C,Q; M,G,NG,R,Z; A,O,U,E,I)ではなく、通常のアルファベットの配列である。これらは後の文法書でもしばしば 'Modern alphabet' と称し、'ancient' であり、'traditional' な oghamの配列とは区別される。

(2) 母音字及び音の説明

1. 'Broad' vs 'slender' vowels

アイルランド語では書記上の母音字が母音的音を示す場合と子音の音質 (口蓋音か非口蓋音か) を示す場合があり、⁹ 5つの母音字のうちその調音位置が高いものを 'slender, small' vowels あるいは 'guthaighe caola' (i.e. E,I)、高くないものを 'broad' vowels あるいは 'guthaighe leathna' (i.e. A,O,U)と呼んでいる。例えば [1740]年版では次のように記されている。

"A, o, and u, are called broad Vowels, and e, and i small.

"A, o, u, are often taken or written indifferently for one another in Irish."

[1740]年版は1712年版の記述をほぼ一言一句踏襲している。¹⁰ 同じく英語で書かれた1652年版では次の通りである。

"The Irish hath also five vowels, viz. a, e, i, o, u, divided into two sorts: the first called guthaighe caola: or vowels of a smaller accent, as e, i.

"The second called guthuighe leathna, or Vowels of a broader accent, as a, o, u.

"Note that a, o, u, are often taken, or written in Irish, one for another indifferently."

5母音が2つのグループ ("broad"と "small, slender")に分けられると明記することに関しては今回見た "The Elements"のどれにも食い違いはない。また以後のどの記述をみても食い違いは考えられない。

2. 'Diphthongs' と 'triphthongs'

'Deafhoghraigh, treafhoghraigh'¹¹すなわち、Diphthong、triphthongと呼ばれている音に関して [1740]年版では次のように述べられている。

"The Irish have 13 Diphthongs, and 5 Triphthongs, (...) in which their several Classes are distinguished by Terms of Arts, beginning with the leading Vowel of each Class. To which their several Quantities are added."

またMac Curtin (1728, p.20)によれば 'diphthong'や 'triphthong'とは次のようなものである。

"From these five vowels [viz. i, e, a, o, u], being joyned, or united together in sundry wayes, do arise thirteen Diphthongs & five Triphthongs. The Diphthongs are so called from having two vowels in one Syllable, and are call'd by the Irish deaghfhoghhracha, and are as followeth ao, ae, ai.

ei, eo, eu, ia, iu, io, eo, ua, ui, qi. The five Triphthongs called by the Irish *treaghfoghacha*, having three vowels in a Syllable, are these *aoi, eoi, eae, iui, uai*."

すなわち、“diphthong”、“triphthong”とは表記上複数の母音字からなる母音結合である。二字からなるものを diphthong、三字からなるものを triphthongと呼ぶ。そしてこれらは、そのクラスターの冒頭字によってグループ分けして言及される。これらのグループの個々のメンバーは、それぞれ下に見るように長さが異なるというわけである。重要なのはこれらは表記文字数の複数性による区別であって必ずしも音声的な多重性に基づいているのではないことである。

諸々の“The Elements”に記述されている母音文字結合(及びMac Curtin(1728))をまとめると以下の通りである。

表3

	版	1571	1652	1680	1712	1728 ⁽¹⁾	[1740]	1742
I.	ae	v ⁽²⁾	v	L ⁽³⁾	L	L	L	L
	ai	v	v	L/S	L/S	S	L/S	L/S
	ao	v	v	L	L	L	L	L
	aoi	v	v	L	L	L	L	L
II.	ea	v	v	L/S	L/S	S	L/S	L/S
	ei	無し ⁽⁴⁾	v	無し ⁽⁵⁾	L/S	S	L/S	L/S
	eo	v	v	L	L	L	L	L/(S)
	eu	v	v	L	L	L	L	L
	eoi	v	v	L	L	L	L	L
III.	ia	v	v	L	L	L	L	L
	io	v	v	L/S	L/S	S	L/S	L/S
	iu	v	v	無し ⁽⁶⁾	L/S	L/S	L/S	L/S
	iai	v	v	L	L	L	L	L
	iui	v	v	L	L	L	L	L
VI.	oi	v	v	L/S	L/S	S	L/S	L/S
V.	ua	v	v	L	L	L	L	L
	ui	v	v	L/S	L/S	S	L/S	L/S
	uai	v	v	L	L	L	L	L

グループ分けをしている:

o o x o o o o

グループの英語名をつけている:

x x x o o o o

表注

(1)H. Mac Curtin(1728).

(2)v印は存在を認めているが、長さの区別については言及のないもの。

(3)Lは‘always long’、L/Sは‘sometimes long, sometimes short’、Sは‘short’の意。

(4).eグループに入るものを4つとし、eiをその中に含んでいない。

(5).⁽⁶⁾言及がない。13のdiphthongsがあると述べているが実際には1つの重複

を含む11種しかあげていない。

I.~V.のグループはそれぞれ次のような名称で言及される。I. amharcuill, II. eabha, III. ifinne, IV. oir, V. uilleanna. 1712年版、[1740]年版、1742年版ではこれらに更にそれぞれ apthongs, ephthongs, ipthongs, ophthong, upthongsという一見英語の名称も与えられるようになる。

O. Bergin(1938, p.221)は Mac Curtinの文法書を評価しつつも一部で多少冷ややかコメントをしている。“He even ventures to coin English terms for the various dipthongs and triphthongs”. しかし、上に見るように apthongs, etc.という名称は Mac Curtin(1728)以前、1712年にロンドンで出版された版に既に用いられていたわけであるから Berginの批判¹²はあたらない。もっとも1712年当時32才ぐらいであった Mac Curtin(1680-1755?)¹³の造語でないという確証もないには違いない。むしろ複合母音字の分類を英語の呼称をつけてまで継承しようとする事自体にアイルランド語音韻論の問題があると理解する方が適切であろう。

“The Irish Grammarians do distinguish these Dipthongs and Triphthongs by Names taken from the leading vowels of each Class; as Amharchoill, Eabh-adha, Ifin, uilleanna, & Qir, as we should call in English, the four that begin with a, Apthongs; those that begin with e, Ephthongs; those that begin with I, Ipthongs; those that begin with u, Upthongs; and the one beginning with o, Opthong.”¹⁴

(3)子音音の説明

子音音はアイルランドの Bardic School Grammarでは5つのグループに分けられている。¹⁵ この分類を明記している “The Elements”は1571年版と1652年版である。

(1)Seven light consonants (Seachd chonsuine edruma)...bh,dh,gh,
l,mh,n,r.

(2)Five strong wightie consonants (Cúig chonsuine teanna, no truma)
...rr,ll,nn,m,ng.

(3)Three hard consonants (Trí chonsuine chruaidhe) ...b,d,g.

(4)Three soft consonants (Trí chonsuine bhoga)p,c,t.

(5)Three rough consonants (Trí Chonsuine gairbha)ch,th,f.

(6)One barren consonant (Consoin aimrid)s.

1680年版、1712年版、[1740]年版では子音の記述は並列的である。[1740]年版では、“The Irish do not delight much in Consonants, and therefore h is frequently added to b, c, d, f, m, p, s, t, to soften the language.”として lenition あるいは ‘softening’が起った場合の音価について、特に bh, mh, dh, ghと表記される音に関して説明がある。また双方で dhと ghの示す音が学習者にとって容易でない旨の指摘がある。しかし resonancyの増加である ‘eclipses’あるいは nasalization’についてはきわめておさなりの説明しかなく、当然これが resonancyの増加と言う体系的変化であるという認識は伺うことができない。1712年版と[1740]年版によるとこれに関しては次のような記述しかない。

"The two g's arae joined together, they are pronounced as g; thus, ccuid, is read guid. And two t's have the force of d; as tteach is read deach when d goes before n, it is pronounced as n, thus ceadna is ceanna. Likewise, when d is placed before l, it hath the force of another l; and ln are read as two lls, e.g. codlah, to Sleep, is read as collah; and colna of the Body, as colla."

Mutationはresonancyの増加("nazalisation"の場合)とfricativityの増加あるいは口腔圧の減少("lenition"の場合)に関して子音全体をスライド的に覆って起こるシステムティックな音変化であるが¹⁶ その事実が伺えるような記述にはなっていない。一方1571年版や1652年版では システムティックな交替現象まではとらえていないにしても、bardic schoolの子音分類に言及し、mutationを被った音の表記を借りて文字の上でこれらの間の言わば力関係は示唆されている。

(4) 略記号の説明

略記号が説明されている程度は版によって異なる。また何を略記号(abbreviation)と呼ぶかも版によって多少違っている。1712年版と[1740]年版では "Irish Abbreviations used in this BOOK"と称して次のようなリストを共に挙げている。

Irish Abbreviations used in this B O O K.

ḡ, ḡ, ḡ, ḡ, ḡ, ḡ, ḡ, ḡ,
ḡ, ḡ, ḡ, ḡ, ḡ, ḡ, ḡ, ḡ,
ḡ, ḡ, ḡ, ḡ, ḡ, ḡ, ḡ, ḡ,
ḡ, ḡ, ḡ, ḡ, ḡ, ḡ, ḡ, ḡ.

記述らしい記述を全く伴わず文字の列挙しかない1631年版では15の例を挙げている。表1のカテキズム中で最も多くを abbreviationとして掲げているのは1652年版である。ここにはこの時代に Gaelic alphabetの印刷本に現れるかなりの "abbreviation"が列挙されているが、このカテキズムの翻訳者であり、言語記述部分の著者である G. Daniell は、 "There are many other Abbreviations in Irish Manuscripts, wherein our Print is deficient, therefore I am inforced to omit them."と注記している。

Abbreviations に列挙されるものは概ね次のように分類することができる。

- (1) Lenition記号(・)を持つ子音の表記をabbreviationとみなしているもの。 例: ḡ (=bh), ḡ (=ch), ḡ (=dh)
- (2) 頻出する単語の省略形と考えられるもの。 例: 7 (=agus ("and"))
- (3) 母音連続("diphthong"や "triphthong")を示す記号。 例: ė (=ea)
- (4) 子音連続を示すもの。 例: ḡ (=chd), ḡ (=nn)
- (5) 母音+子音を示すもの。 例: ȯ (=on), ė (=em), i̇ (=imh)

Abbreviationを用いなければ個々の語の表記が長くなるので、とりわけ手書きする際にはこれらは効をなしたことだろう。注目すべきは lenition記号を伴う表記をabbreviationと考えている点であろう。1652年版、1712年版、そして[1740]年版はともに同じ

考え方をしている。1742年版では子音説明の部分でこの記号に関して次の様に述べている。

“That the Irish do not delight much in hard consonants, and therefore an (h) is frequently added to b, c, d, f, g, m, p, s, t, to soften the Language, and sometimes to denote the Gender too. This Point or Note (*) over a Consonant stands for this softening (h), so, that g is the same with ch, &c.”

(*)を一見 h 付加の手間を省く方策と考えているように見えるが、この点は文字として h が占めている地位や、語頭子音の統語環境の変化に伴う音声変化 (mutation) に対し、ここで吟味したすべての “The Elements” が堅持している ‘Radix’ あるいは ‘root’ を表記上残すという立場、つまり音声主義ではなく形態音素主義との係わりから評価しなければならない。多くの “The Elements” や以後の文法書がアイルランド語には 17 (あるいは 18) 文字しか必要ないことを強調するのもこの形態音素主義の所以である。H を他の子音文字同様 mutation の対象として位置付けていると解釈できる表が 1680 年版には付記されているが、このような表¹⁷⁾はきわめて例外的である。

(5) その他

音に関する記述以外の文法的事項に言及している場合もあるが、どれも極めて断片的である。1712年版と [1740] 年版には異口同音に次のような言及がある。

“The variation of a word in Number, Case, or Tense, is very often indicated by adding a different Consonant to the Initial one; and that the Initial Consonant (called litir shealbhuighthe, i.e. the possessive Letter, because it possesseth the first place in the Nominative Case, in present Tense indicative) is quiescent, and the additional only pronounced; thus popul in the Nominative, is altered into bpopul in the Ablative, the p not being pronounced: but the Initial or possessive Letter is always written, to shew the Primitive, or Radix of the word.”

1652年版では今回閲覧できた版には 1 葉 (2 ページ) の落丁があつて言明はできないが、その部分は子音に関する解説の途中からであるので、他の parts of speech や統語についての言及が多く含まれているとは考え難い。結局 “The Elements” では子音の mutation の誘因となる統語環境の変化に係わる他品詞や文法範ちゅうの言及は多少はあるが、それら自体を記述の対象とするには至っていない。

2. “The Elements” の流れとカテキズム著／編者のアイルランド語観

Salmon (1985) はアイルランドで活動した高位の国教会派僧職者たちの言語観に目を向ける必要のあることを示唆している。Salmon の言及しなかった 18 世紀初期のカテキズムである 1712 年版、[1740] 年版の著／編者の John Richardson はその意味で最も注目し価値する。

彼はアイルランドの教化のために聖書や祈祷書、カテキズムをアイルランド語で印刷することを強く主張している。¹⁸⁾ 更に 1712 年に著した A Short History of the Attempts That have been made to Convert The Popish Natives of Ireland to the Establish'd Religion ではアイルランド語の印刷には gaelic types を用いることを強く勧めている¹⁹⁾。彼は English alphabet と Irish alphabet が基本的には同じであつてその表

面的な形状の差から後者の使用を拒否するにはあたらないこと、またたとえ English alphabetでアイルランド語が書かれてあったとしてもそれだけでアイルランド語が読めることにはならないと論じている。

“...; any one, who will be pleased to make the trial will find, that although he can Read English in the greatest perfection, yet he shall not be able to Read Irish in the English character, without first learning the Elements of the Irish Tongue, and understanding the Power of their Letters, and of the several compositions of them, to which purpose, he will find the Irish character much more useful and subservient, than any other.”

Richardsonは更に、Irish alphabetを用いて然るべく表記することで識字能力に関して過去の伝統を継承することができると述べている。そして O'Kearney 以来のプロテスタントの宗教書が Irish types を用いてきたことを高く評価している。

同じプロテスタントであっても English alphabet で印刷された Rathlin catechism や、正書法自体が英語音を基としていたマン島語の一連の宗教出版物と比較すると、Richardson の立場が言語に関する限り強くアイルランド語尊重を貫こうとしているのがよくわかる。アイルランド語の伝統を尊重しようとする、これを学ぼうとする者にアイルランド語のメカニズムを記述し教授する必要がある。この種のカテキズムのひな型となった O'Kearney (1571) 以来の伝統とはいえ、Richardson の言語観をもってすればカテキズムに “The Elements” をつけるのは不可欠のことであった。

Bardic school の子音分類に言及することを子音の記述としているのは 1571 年版と 1652 年版である。1742 年版や Mac Curtin (1728, 32) でも ‘ancient grammarians’ や ‘poets’ の行なった分類として載せてはいるが、1680 年版、1712 年版、[1740] 年版では子音の記述は個別的、並列的である。他方 1742 年のカトリックのカテキズムについて “The Elements” では記述のスタイルがかなり違っている。音の記述も英語音と比較することが多くなる。これは、Mac Curtin を端とし、この頃から英語をアイルランド語記述のメタ言語として用いる程度が次第に増して行ったためと考えられる。加えて、子音分類が詩の伝統により直接的に繋がっているという意識があったためかもしれない。

3) “The Elements” の母音論

“The Elements” の記述には長短があるが、1631 年版を除いてすべてに共通するのは母音の取扱方である。すなわち、母音は幾つかのグループに分けて必ず言及されている。しかし、その分類のメリットや意義は記述からは容易には伺い知れない。Amharcuill, etc. が apthong, etc. と呼び換えられたことに Bergin は冷ややかであった。しかし既に見たように Apthong, etc. という名称は Mac Curtin 以前にすでに公になっていた呼称であって、特別 Mac Curtin の戯れというわけではない。従って、apthong, etc. を “The Elements” で用いる意味は英語で呼びやすい名称を作っても母音の分類をアイルランド語の読み方の基本として持込むことを便利と考えた、そのこと自体である。そこでこのような母音のグループ分けの背後にある意味を考えることにしたい。

アイルランド語にとって母音が重要であり、かつ習得が容易でないという認識は 1712 年版、[1740] 年版に異口同音に見られる次のようなコメントからも伺える。

“The greatest difficulty of Reading, or speaking Irish consists in pronouncing dh, gh and the Diphthongs and Triphthongs aright; but this is readily attained by a little instruction by the Ear, and Practice; whereby the Pronunciation of the language is rendered easy and agreeable, there being much use made of Vowels, and little of Consonants in it.”

“The Elements”の記述では母音（字）に関して次のような区別をしている。

1571年版

Guthaighi (i.e. guthaoighe leathna (a,o,u) & guthaige chaola (e,i))
Diftongoi (i.e. amharcuill, eabha, uilleanna, ifine, oir)

1652年版

Vowels (i.e. guthaighe caola, or vowels of a smaller accent (e,i);
guthaighe leathna, or vowels of a borader accent (a,o,u))
Diphthongs (5 sorts: amairchuill, eabha, ifini, oir, uillionna)

1680年版

Guthaighe (i.e. guthaighe leathan (a,o,u) & guthaighe caol(e,i))
Deafhoghraigh
Treafhoghraith

1712年版、[1740]年版

Vowels (i.e. broad(a,o,u); small(e,i))
13 Diphthongs } {Amharchuill, eabha,
5 Triphthongs } { ifine, oir, uilleannasll. }

1742年版

Vowels (i.e. broad or flat(a,o,u); small or sharp(e,i))
Compositions

of the Vowels: Diphthongs } {in 5
Triphthongs } {classes or ranks: {Amharchuill, eabha,
ifine, oir, uilleannasll. }

またMac Curtin(1728)では、

Vowels (i.e. broad(a,o,u); small(e,i))
Diphthongs } {in 5
Triphthongs } {classes: {Amharchuill, eabha, ifine, oir, uilleannasll. }

注目すべきは1571年版や1652年版では diftongoiや diphthongsは母音文字が2つのもの、3つのものの両方を指していることである。また amharchuill, etc.の呼称は含む母音字の数に縛られてはいないことである。母音結合そのものに関し1712年版、[1740]年版では次のように注記されている。

“(Note,) That all Vowels, coming together without a consonant interposing, make but one Syllable.”

母音字の数に係わりなくそれらは全体でひとつの音節を形成するわけである。

表3に挙げた母音結合の記述の比較で気づくのは、1728年のMac Curtinの “The Elements”では他の “The Elements”でL/Sの双方を挙げているのに、Mac CurtinはSにしか言及していないことである。また1571年版では eabha(epthongs)を4つとし、全体で17をあげている。このeiの欠如は1680年版にもみられるが、こちらにはiuも欠けている。さらにもう一点の不整合はeoが1742年版ではL/Sであるが他では皆Lのみであることである。Ų Cuíiv(1964-67, p. 288)はIGT § 12の記述に基づきfoirfheadha (複合母音字群全体を指す)を全部で17 (e群 4、o群 1、u群 3、i群 5、a群 4)とし、Mac Curtin(1728)の記述中で欠けている部分を補い、また不要と思われるものを削除している (“It will be seen that he has disregarded ai, oi, ui, io and short eo, while he has included ei which is hardly to be classed among the eabhadha.”)。もしこれに従えば、amharchuill, etc.の記述の対象となる母音結合は次の通りとなる。

ae(L), ai(L/S), ao(L), aci(L); ea(L/S), eo(L/S), eu(L), eoi(L);
ia(L), ig(L/S), iu(L/S), iai(L), iui(L); oi(L/S); ua(L), ui(L/S), uai(L).

音節としてひとつの纏まりをなす母音字結合は書記上はそのクラスターの冒頭の文字で識別され、音声的には音節の長さで区別されていることになる。以下で母音結合を文字数と長さによって分類する。

I. 母音文字数：2

a. 音節長：Short

		I	E	V ₂	A	O	U
	I	X				io	iu
V ₁	E		X		ea	eo	
	A	ai			X		
	O	oi				X	
	U	ui					X

b. 音節長：Longのみ

		I	E	V ₂	A	O	U
	I	X			ia		
V ₁	E		X				eu
	A		ae		X	ao	
	O					X	
	U				ua		X

c. 音節長：Long/short

		I	E	V ₂	A	O	U
	I	X			ia	io	iu
V ₁	E		X		ea	eo	eu
	A	ai	ae		X	ao	
	O	oi				X	
	U	ui			ua		X

II. 母音文字数：3

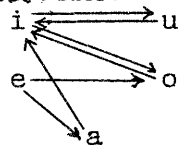
d. 音節長：Longのみ

		I	E	V ₂	A	O	U
	I	X			iai		iui
V ₁	E		X			eo	
	A				X	ao	
	O					X	
	U				uai		X

書記上の音節の構造を以下のように示すとすると、上記の複合母音字音節は次のように解釈できる。(以下、“small, slender” vs “broad”の対立は“front” vs “back”の対立と読みかえる。)

I. 母音文字数：2

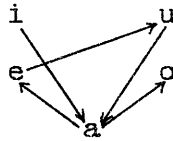
a. 音節長：Short



このグループのメンバーは次のように大別できる。
V₁ = back かつ V₂ = front vs V₁ = front
かつ V₂ = backつまりこの対立の段階では最大限
に対立しているわけである。この時、V₁ = backで
あればV₂は一義的に i になっており、V₁ = front
であればその調音位置が高いほどV₂も高い方が選

択可能音（文字）となっている。

b. 音節長：Longのみ



このグループはfront vs back, high vs lowという対立を極化させない方向で必要な区別を維持していると思われる。aを中心に図式的には次のような関係をなしている。つまりこれから推論すればこのグループのメンバーとして予測されるのは aiであり eiではない。ただし、aiは上に見るように shortで存在するので 'longのみ' としては存在しない。

C. 音節長：Long/short

これは上記2グループの重なり合いである。(Shortであるものは必ずlongでもある。)

I I. 母音文字数：3 (音節長：Longのみ)

このグループのメンバーはV2, V3に関する選択が限定されている。つまり、V2=backであり、V3=iと決まっている。ただし、V1=oがない。これはおそらくV1レベルの対立はfront、backそれぞれのグループのなかで high、lowが最大限に対立させられているからである。これらに更にこの言語にとって音節構成の大原則とみられる hiatusを許容しないというルールが加わってこの3母音文字結合の音節表記があるとみられる。

上のような解釈をすることは文字を即、音として扱うという意味ではない。実際上記の分類の中で利用した音声に関する記述は母音の長短に関する記述だけである。しかし、記号が何等かの合理的なルールに基づいて用いられているとすれば記号上の区別にはそれに対応する、少なくとも規範的な音声的区別があると思われる。また、母音に関する上のような分類はアイルランドの bardic schoolの伝統、つまり文字の伝統を踏襲したものである。E.Knott(1957, p.3)は "In reading syllabic poetry words are to be pronounced as spelt." と述べている。従って、いわば「文字の使われ方」のルールの説明は重要である。

Hiatusに関してMac Curtin(1728, p.23)は次のようにのべている。"No vowel is to be doubled in any one syllable in this language, as ee, etc." Hiatusを伴う母音結合が存在しないということはおそらく子音の mutationの機構と関係があると思われるが²⁰、このルールはいわばどの母音にも等しく適用されるルールである。つまり適用される母音に傾きのない、"static"なルールであり、おそらくこの言語の基本的なリズム感と繋がっているルールであろう。これに対し、母音を 'broad' と 'small, slender' とに2分し、文字による表記の分布上からみると、これらの対立を際立たせようとする働きと、この対立を収束させようとする働きがあるように見える。しかし、こちらはその適用に母音間の差があってもいい。"The Elements"が踏襲してきた母音字結合の分類はこのような言語内の異なる傾向の結果をおそらく一番覚えやすい形でまとめたものではないだろうか。母音字結合を5つに分類したあとで1652年版は次のようにコメントしている。

"Beyond Seas, they divide them into Diphthongs, and Triphthongs; though the same in substance, but this old division is more methodical, and ought most to be followed."

ある種の対立の基点から遠ざかる観点と、その点に近づき収束しようとする観点、及びこれらをそういった動的な観点の対象とは捉ええず、静的にみるという視点はアイルランド語の場合他の色々な側面でも見られる特徴である。例えば一連の方向指示詞などはその典型である。これらは意味的にもその観点の存在が明らかな例であるが、音のレベルでも伝統的なアイルランド語の音韻論はこういう複数の対立の視点（静的 vs 動的、収束 vs 拡散）を組合わして取込むことを、様々な分類を持込むという形で行なってきた。

たのではないだろうか。(Cf. Calder ed., trans. (1917), *Auraicept na n-Éces*)そしてそれによって文字という抽象のレベルと音という具体のレベルとを結びつけていたように思われる。しかも、アイルランドでは“ogham”といえば書き言葉を、“gaeilge”といえば話し言葉を意味した伝統がある。“The Elements”の記述も実はこの伝統の延長にある。しかし、他方この伝統を支えて来た bardic schoolの崩壊と、カテキズムの言語が詩ではないこと、また“The Elements”が作詩のための文法を目的としていたのではないことから、次第に他言語をメタ言語として記述しやすい子音部分が先に個々の音の並列的な記述へと移っていったのではないかと推察される。その見地からするとRichardsonの次のコメントは興味深い。“In the Irish Language there is much use made of Vowels, and far less of Consonants than in the English: (...)”²¹

3. 結論

印刷本のプロテスタント、及びカトリックのカテキズムに付加された“The Elements of the Irish Language”は従来語学的にそれほど的重要性があるものとは考えられていなかった。もちろんこれらのなかでも古いものはそれなりの注目を受けてはいた。1571年版などである。

Colman O Huallachain(1980)はアイルランド語研究の流れを考えるにあたってこの種のリーフレット級のものまでを含む資料に目を向けた数少ない論文であるが、リストとしての性格が強く、資料を細かく比較するには至っていない。

しかし、実際にこれらの特に初期のものを比較してみるとアイルランドの bardic school崩壊後からMac Curtinの英語によるアイルランド語文法への過渡期の様子が伺える。この間の“The Elements”を通してみると、母音については bardic schoolの考え方が踏襲され、母音字結合の分類については bardic schoolの術語に対応する英語まで作られてその区別が記述の中心をなしている。それほどまでにこの分類に固執するのはこの言語にとって何か本質的な問題をこの母音に対する処理の仕方が含んでいるからではないだろうか。

一方子音については1600年代の終りから bardic schoolの子音分類を記述の中心に置かなくなっていることがわかる。母音字結合についても、ここで用いられている‘diphthong, triphthong’という術語は英語でいう場合とは意味が異なり、書き言葉の、いわば oghamレベルの問題として記述されている。従って、今日的な言い方をすればここには音韻レベルの記述と音声レベルの記述がある意味で混在し、ある意味で葛藤しているといえる。また、bardic schoolの分類好きはこの抽象と具体の2つのレベルを結びつける方法であったと推測できなくもない。

この時期は更にアイルランドの伝統的語学から、記述のメタ言語として英語が用いられるようになっていく過渡期でもある。通常 Mac Curtinの文法書の背後に主にLouvainのフランシスコ派の亡命学僧らの言語研究の未出版の成果を暗に認めることは多い。しかし、おそらくこの当時の言語研究に関しては対立すべきはカトリックでもプロテスタントでもなかったのではないだろうか。アイルランド語研究の書誌学的観点からもその対象として一連のカテキズムの“The Elements”を含めることは重要なことであると思われる。

注

- ¹この文法書は、版組自体は異なるがほぼ忠実に1732年にパリで出版された英語-アイルランド語辞典に復刻されている。(Hugh Mac Curtin & C. O' Beaglaoich. The English-Irish Dictionary. Paris:James Guerin, 1732.)
- ²今回利用したカテキズムの資料、及びH. Mac Curtinの文法書(1728, 1732)は全てロンドンの大英図書館および、ダブリンの Royal Irish Academy Libraryで閲覧し、またマイクロフィルムによる複製の提供を受けた。記してお礼申上げる。
- ³“The Elements” はしばしば “ABC (Aibghitir)” と呼ばれる。
- ⁴この資料には英語、アイルランド語それぞれの使用されている活字のリストがあるのみ。説明は全くなし。
- ⁵Dowley(1728)はDowley([1663])の第2版と考えられている。第2版はMac Curtin(1728)の付録として印刷されており、当然これには “The Elements”はない。
- ⁶C f. Brian Ó Cuív(1980), p.107: “An obvious one (example of aibidil) is Aibidil Gaoidheilge, et Caiticíosma, the title of the first Irish book to be printed in Ireland, Seaan O'Kearnaigh's Catechism' of 1571. Prefixed to the 'catechism' is a section on Irish letters intended as an aid to reading the text. The running title here(pp.6-10) is aibghitir, and both aibghitir and aibidil are used, without any obvious distinction between them,”
- ⁷この資料は大英図書館内で一時行方不明のため未見。
- ⁸C f. Brian Ó Cuív(1980).
- ⁹Salmonは後者の場合を ‘diacritic vowels’と呼んでいる (Salmon 1985, p.334)。
- ¹⁰1712年版と[1740]年版はロンドンの同じ印刷所で印刷されたものである。表1に上げたものの印刷出版地は以下の表の通り。

	宗派	出版年	出版地	印刷者	‘ABC’言語
(1)	新	1571	Dublin		Irish
(2)	新	1631	Dublin	The Company of Stationers	Letters
(3)	新	1652	Dublin	William Bladen	English
(4)	旧	[1663]	Louvain		Irish
	旧	1677	Rome		
(5)	新	1680	London	Robert Everingham	Irish
(6)	新	1712	London	Elenor Everingham	English
(7)	旧	1728	Louvain	Martin van Overbeke	無
	旧	1728	Louvain	Martin van Overbeke	
	旧	1732	Paris	James Guerin	
(8)	新	[1740]	London	Elenor Everingham	English
(9)	旧	1742	Paris	James Guerin	English

¹¹1571年版では母音字数が2つか3つかの区別をせず、双方をともに 'diptongoi' と呼んでおり、これには 'deafhoghraigh, treafhoghraigh' は出て来ない。

¹²BerginもMac Curtinが複合母音の分類を英語名をつけて踏襲しbardic schoolの伝統を継承している点を評価してはいるのである。

¹³R.K.Alspach (1901), p.79.

¹⁴Mac Curtin(1728), p.20.

¹⁵E. Knott(1957), p.5.

¹⁶C f. Brian Ó Cuív(1966).

¹⁷Catechism(1680).

bá, be, bí, bó, bú.	bá, be, bí, bó, bú.
cá, ce, cí, co, cú.	cá, ce, cí, co, cú.
dá, de, dí, dó, dú.	dá, de, dí, dó, dú.
fá, fe, fí, fí, fí, fí.	fá, fe, fí, fí, fí, fí.
gá, ge, gí, gí, gí, gí.	gá, ge, gí, gí, gí, gí.
há, he, hí, hó, hú.	má, me, mí, mó, mú.
lá, le, lí, lí, lí, lí.	pá, pe, pí, pó, pú.
má, me, mí, mó, mú.	rá, re, rí, ró, rú.
ná, ne, ní, nó, nú.	tá, te, tí, tó, tú.
pá, pe, pí, pó, pú.	báit, maic; móm, cóm:
rá, re, rí, ró, rú.	buidé, cmaidé; beóir, téoir
rá, re, rí, ró, rú.	buidé, baidé; cmaidé, téoir
tá, te, tí, tó, tú.	

¹⁸J. Richardson(1712), catechism preface.

¹⁹J. Richardson(1712), "An Appendix Concerning the Irish Character", p.4.

²⁰Hが文字として存在しないとよく言及されるのもlenition記号として以外に出現するのが母音の前であって (e.g. éanacha (birds), na h-éanacha (the birds)), 母音で始る語はいわば常にlenitionを受けた形で出ていると考えられる。これからすれば注17に挙げた表は極めて音韻論的解釈をした表(もっとも表のすべてではないが)だといえる。

²¹J. Richardson(1712), "An Appendix Concerning the Irish Character", p.4.

Bibliography

- Alspach, Russell K.(1960). Irish Poetry from the English Invasion to 1798. Philadelphia:Univ. of Pennsylvania Press (rpt. AMS(1978)).
- Bergin, Osborn(1938). "The Native Irish Grammarian"(The Sir John Rhŷs Memorial Lecture), Proceedings of the British Academy Vol.24, pp.205-235.
- Bliss, Alan(1978). "The English language in early modern Ireland" in T.W.Moody, F.X.Martin, & F.J.Byrne eds., A New History of Ireland III-Early Modern Ireland 1534-1691. Oxford Univ. Press, pp.546-560.
- Calder, George ed., trans.(1917). Auraicept na n-Éces(The Scholar's Primer). Edinburgh: John Grant.
- Dowling, P.J.(1935, rev.1968). The Hedge Schools of Ireland.Dublin: The Mercier Press.
- Edwards, R.W.Dudley & Mary O'Dowd(1985). Sources for Early Modern Irish History 1534-1641. Cambridge University Press.
- Greene, David(1976). "The Diphthongs of Old Irish" Ériu 27, pp.26-45.
- Knott, Eleanor(1957). An Introduction to Irish Syllabic Poetry of the Period 1200-1600, second ed.. Dublin: Dublin Institute for Advanced Studies.
- Mac Curtin, Hugh(1728). The Elements of the Irish Language. Grammatically Explained in English. Louvain.
- Mac Curtin, H. & C. Begly(1732). The English Irish Dictionary. Paris: James Guerin.
- McAdoo, H.R.(1940). "The Irish Translations of the Book of Common Prayer", Éigse Vol.2, pp.250-257.
- Michael, Ian(1970). English Grammatical Categories and the Tradition to 1800. Cambridge University Press.
- Ó Cuív, Brian(1950). "Flaithrí Ó Maolchonaire's Catechism of Christian Doctrine", Celtica 1:2, pp.161-205.
- (1964-67). "A Fragment of Bardic Linguistic Tradition" Éigse 11, pp. 287-288.
- (1965). "Linguistic Terminology in the Mediaeval Irish Bardic Tracts", Transaction of the Philological Society, pp.141-164.
- (1966). "The Phonetic Basis of Classical Modern Irish Rhyme" Ériu 20, pp.94-103.

- (1973). The Linguistic Training of the Mediaeval Irish Poet. (Statutory Lecture 1969, School of Celtic Studies.) Dublin: Dublin Institute for Advanced Studies.
- (1978). "The Irish language in the early modern period", in T.W. Moody, F.X. Martin, & F.J. Byrne eds., A New History of Ireland III-Early Modern Ireland 1534-1691. Oxford Univ. Press, pp.509-545.
- (1980). "Irish Words for 'Alphabet'", Ériu 31, pp.100-110.
- Ó Huallacháin, Colmán (1980). "Towards a Bibliography of Irish-Gaelic Language Teaching Materials from the Seventeenth Century until Today", in Robin Thelwall ed., Linguistic Studies in Honour of Paul Christophersen (Occasional papers in Linguistics and Language Learning No.7.). The New University of Ulster Press, pp.153-177.
- O'Mahony, Seán (1981). "The Preface to William Bath's 'Ianua Linguarum(1611)'", Historiographia Linguistica VIII:1, Amsterdam: John Benjamins, pp.131-164.
- Ó Mathúna, Seán P. (1986). William Bath. S.J.. 1564-1614: A pioneer in linguistics. Amsterdam: John Benjamins.
- Richardson, Rev. John (1712). A Short History of the Attempts that have been made to Convert the Popish Natives of Ireland to the Establish'd Religion with a Proposal for their Conversion. London: Joseph Downing.
- Rowe, John H. (1974). "Sixteenth and Seventeenth Century Grammars" in Dell H. Hymes ed., Studies in the History of Linguistics. Bloomington: Indiana University Press, pp.361-79.
- Quinn, E.G. (1971). "The f-future in Stapleton's Catechismus", Ériu 12, pp.174-175.
- Salmon, Vivian (1966). "Language-Planning in Seventeenth-Century England; Its Context and Aims" in C.E. Bazell et als. eds., In Memory of J.R. Firth. London: Longmans, pp.370-397.
- (1979). The Study of language in 17th-Century England. Amsterdam: John Benjamins.
- (1983). "William Bedell and the Universal Language Movement in Seventeenth-century Ireland", Essays and Studies 36, pp.27-39.
- (1985). "Missionary Linguistics in Seventeenth Century Ireland and a North American Analogy", Historiographia Linguistica 12:3, pp.321-349.
- Tynan, Michael (1985). Catholic Instruction in Ireland 1720-1950. Blackrock, Co.Dublin: Four Courts Press.